

『Ode to a Nightingale』一考察

—歌声に耳を澄ます時—

永井豊実

序

キーツの詩に見られる特徴の一つとして、エッセンスに満ちた言葉を最初に提示して、それを分析していくもの（例えば *Endymion* の冒頭の言葉）と、最後に示すもの（例えば *Ode on a Grecian Urn*）とか、各連の中で命題を出して、それを解き明かしていくもの（例えば *To Autumn*）とかがある。この *Ode to a Nightingale* は語の連想によってイメージが沸き上がり、鎖のように次々と繋がって行って、静かに消えていき、最後に疑問を提示するようなものもある。その疑問をまた読者は問い直すことになる。

1819年4月30日頃にこの詩の草稿はでき上っていたのではないかと推測されているが¹⁾ 5月始めには既にできていて、後に手を加えられ、*Annals of the Fine Arts* の7月号に発表された²⁾。友人の Brown 氏が書いているところによると、「1819年の春、一羽のナイチンゲールが庭に巣を作った。キーツは鳥の鳴き声に絶えず静かな喜びを覚えていて、ある朝、朝食のテーブルから椅子を持ち出して、プラムの木の下で芝生で2・3時間座っていた。家に入って来た時には、手に何枚かの紙を持っていた³⁾」云々と言っている。詩を何処で書こうと構わないが、ナイチンゲールに対する愛着が、普通の伝統的なメランコリーとしての鳥ではなく、幸福な鳥として扱っている⁴⁾ ところに、この言葉から伺われる。事実幸福な鳥の歌に酔いしれて、胸に痛みを覚える程になっているのだが、言葉の綾にひかれてしまい、空想と覚醒との間に揺れ動いてしまう。この間の心理的動きを追うことが、この詩を味う大事な要点であると思う。言葉の連鎖とイメージを一つ一つ追い求めていってみたい。

ODE TO A NIGHTINGALE

I

Mr heart aches, and a drowsy numbness pains
 My sense, as though of hemlock I had drunk,
 Or emptied some dull opiate to the drains
 One minute past, and Lethe-wards had sunk :
 'Tis not through envy of thy happy lot,
 But behind too happy in thine happiness,—
 That thou, light-winged Dryad of the trees,
 In some melodious plot
 Of beechen green, and shadows numberless,
 Singest of summer in full-throated ease. 10

II

O, for a draught of vintage ! that hath been
 Cool'd a long age in the deep-delved earth,
 Tasting of Flora and the country green,
 Dance, and Provençal song, and sunburnt mirth !
 O for a beaker full of the warm South,
 Full of true, the blushful Hippocrene,
 With beaded bubbles winking at the brim,
 And purple-stained mouth ;
 That I might drink, and leave the world unseen,
 And with thee fade away into the forest dim : 20

III

Fade far away, dissolve, and quite forget
 What thou among the leaves hast never known,
 The weariness, the fever, and the fret
 Here, where men sit and hear each other groan ;
 Where palsy shakes a few, sad, last gray hairs,
 Where youth grows pale, and spectre-thin, and dies ;
 Where but to think is to be full of sorrow
 And leaden-eyed despairs,
 Where Beauty cannot keep her lustrous eyes,
 Or new Love pine at them beyond to-morrow. 30

I

胸が痛む。眠くなるような麻痺が
 感覚を痛める。ほんの少し前 まるで毒人参を飲んだよう、
 何かだるくなる阿片を澱^{おろ}まで飲みほし、
 忘れな河に向って沈んだようだ。
 お前の幸運 妬むでなく、
 お前の幸せ あまりに幸せ覚えるから。
 お前は 軽い翼の木々の精、
 何処か 緑のブナの木
 蔭も無数に調べの森で、
 喉一杯に伸びやかに夏を^{たた}称えて歌うから。

II

ああ 一杯の葡萄酒を、飲みほしたい！
 地中深く穿^{うが}たれて、長い年月冷されたもの、
 味わいはフローラ（花の女神）、緑の田園、
 踊りに プロヴァーンス、陽焼けた人の歓楽ぞ。
 ああ 大杯よ、暖かい南国で満ち満ちて、
 真実、真赤なヒポクリーニ（詩的靈感の泉）に湛えられ、
 縁^{ふち}では珠なす泡がまばたきする、
 深紅に染まった口（注ぎ口）をして
 その一杯を飲みほして この世を秘かに離れたい、
 お前と共に 小暗き森に消えゆきたい。

III

はるか彼方に薄れゆき 融け入りて 忘れたい、
 葉蔭の中のお前には 決して分らぬことどもを、
 倦怠 熱病 焦燥は
 この世のものよ、人々互いの呻きを坐して聞く。
 中風病みの老人は あわれ、最後の白髪震わせる、
 若者は色青ざめて 亡霊みたいにやせて死ぬ。
 物思うこととは悲しみに、
 鈍色目をした絶望に 満ちあふれることに他ならぬ、
 美人は輝く明眸保ち得ず、
 芽生えた愛は眸を焦れて明日越さぬ。

IV

Away! away! for I will fly to thee,
 Not charioted by Bacchus and his pards,
 But on the viewless wings of Poesy,
 Though the dull brain perplexes and retards :
 Already with thee! tender is the night,
 And haply the Queen-Moon is on her throne,
 Cluster'd around by all her starry Fays ;
 But here is no light,
 Save what from heaven is with breezes blown
 Through verdurous glooms and winding mossy ways. 40

V

I cannot see what flowers are at my feet,
 Nor what soft incense hangs upon the boughs,
 But, in embalmed darkness, guess each sweet
 Wherewith the seasonable month endows
 The grass, the thicket, and the fruit-tree wild
 White hawthorn, and the pastoral eglantine ;
 Fast fading violets cover'd up in leaves ;
 And mid-May's eldest child,
 The coming musk-rose, full of dewy wine,
 The murmurous haunt of flies on summer eves. 50

VI

Dakling I listen ; and, for many a time
 I have been half in love with easeful Death,
 Call'd him soft names in many a mused rhyme,
 To take into the air my quiet breath ;
 Now more than ever seems it rich to die,
 To cease upon the midnight with no pain,
 While thou art pouring forth thy soul abroad
 In such an ecstasy !
 Still wouldst thou sing, and I have ears in vain—
 To thy high requiem become a sod. 60

IV

去れよ 去れ！ お前の所へ飛んでゆく、
 酒神と豹の車に乗らず
 目に見えぬ詩想の翼に乗ってゆく
 鈍き頭は戸惑い遅れど。
 ああ既によし お前と共だ！ 何と優しい夜なのか。
 恐らく月の女王は玉座に昇り、
 星の妖精あたりに群がる。
 だがしかし ここには光何もなし、
 微風に吹かれ 天から洩れくる光の他は、
 緑の暗闇 つづれる苔道吹き抜けて。

V

足元に どんな花々あるのやら、
 枝々に どんなほのかな香り懸るやら 分らぬが、
 香りに満ちた闇の中 甘い匂を押し当てん。
 折りしも五月の与える香り、
 草に 繁みに 野生の果樹に、
 白いサンザシ 牧歌の野バラ、
 疾くとに褪せゆくスマイレの花は、葉蔭にすっかり覆われた。
 五月半ばの長姉は
 今咲き出すジャコウバラ、露のうま酒たっぷりためて、
 ぶんぶん羽虫の群がる夏の夕。

VI

暗い中にて私は聴き入る。幾たびこれまで
 安らかな 死をば半ば恋したことか。
 多くの想いの詩の中で 優しい名前呼びかけた
 大気の内に静かな息を引きとれと。
 今死ぬことがいつにもまして 豊かに思える時はない
 この真夜中に苦痛もなしに止むことが、
 お前が魂注ぐ間に
 かくも歓喜につつまれて！
 いついつ迄も歌うだろう。聴き耳立てても無駄である—
 お前の高いミサ曲に 芝生の土になっていて。

VII

Thou wast not born for death, immortal Bird !
 No hungry generations tread thee down ;
 The voice I hear this passing night was heard
 In ancient days by emperor and clown :
 Perhaps the self-same song that found a path
 Through the sad heart of Ruth, when, sick for home,
 She stood in tears amid the alien corn ;
 The same that oft-times hath
 Charm'd magic casements, opening on the form
 Of perilous seas, in faery lands forlorn. 70

VIII

Forlorn ! the very word is like a bell
 To toll me back from thee to my sole self !
 Adieu ! the fancy cannot cheat so well
 As she is fam'd to do, deceiving elf.
 Adieu ! adieu ! thy plaintive anthem fades
 Past the near meadows, over the still stream,
 Up the hill-side ; and now 'tis buried deep
 In the next valley-glades :
 Was it a vision, or a waking dream ?
 Fled is that music :—Do I wake or sleep? 80

VII

死ぬ為にお前は生れはしない 不滅の鳥よ！
 いかに飢えた世代でもお前を決して踏みしだかない。
 過ぎゆく夜に聴く声は
 昔の日々に帝王や野人によって聴かれたもの、
 恐らく同じ歌声は ルツの悲しい心の内に
 深く通ってしみ入った、古里恋しと
 涙に濡れて 異国の^{はたけ}麦畑に立ちし時。
 しばしば同じ歌声は
 魔法の窓を魅了した、危険な海の
 白く泡立つ波に開く はるか寂しいお伽の国の。

VIII

はるか寂しい！ 正にその語は鐘のよう
 弔い響いて、お前の元から一個の自分に引き戻す！
 さらばよ！ 空想とてもそれ程巧みに騙し得ず
 名にし負う程のこともない 欺きの精。
 さらば！ さらばよ！ 欺きの賛歌は
 近き^{まき}牧場を通り過ぎ 静かな流れを越えてゆき、
 丘の中腹^{なかはら}上って行って 向うの谷間の空き原に
 深く深く埋れていった。
 幻影だったか 目覚めた夢か？
 調べは去った。目覚めているのか 眠っているのか？

(試訳⁵⁾)

この詩の構成は主に quatrain (4行連) と sestet (6行連) の ten-line stanza (10行連) からでき上っており、iambic pentameter (弱強5歩格) (8行目は trimeter (3歩格)) (第2 stanza の10行目は Alexandrine (iambic hexameter, 6歩格)⁶⁾ で abab cdecde の end-rhyme が踏まれている。従って一つのスタンザの中で意味上前半と後半との関係を見たり、更には couplet (2行連) や tercet (3行押韻連句) に分けて見ていくスタンザもあり、第5スタンザのように続いて見ていくのもある。そして caesura (中間休止) や sound によって微妙な意味合いを醸し出しているのも、聴覚や色彩感覚や臭覚などは疎かに^{おろそ}できない。既に第1スタンザからして、詩の form と意味から、胸の痛みと、麻痺による感覚的な痛みを訴えている。

I

My heart aches, and a drowsy numbness pains

My sense, as though of hemlock I had drunk,

Or emptied some dull opiate to the drains

One minute past, and Lethe-wards had sunk :

私の胸は痛む、それに眠くなるような麻痺が

私の感覚を痛める。ほんの少し前にまるで毒人参を飲んだか
何かだるくなるような阿片を澱まで飲みほしたかのように、
そして忘却^{レテ}の河に向って沈んでいったようだ。

何か矛盾するような意味合いではっきりとした説明があるような個所である。多くの解説書の中で、明確に解き明かしているのは小川和夫教授で、「Ode to a Nightingale⁷⁾」論の中で詳しく説かれている。そのほんの一部を引用させて頂くと、<my heart aches は「心が痛む」とともに「心臓が痛み、胸が痛む」のであり、「眠気を催す痺れ」で痛みをあたえられる My sense は「肉体的感覚」と同時に「気持」をも含んでいる>そして<「快感として感じられるものは、それが極端に達する場合、苦痛になる」という心理的事実は、麻酔剤のメタファが指示する通りでなければいけないのであり、「快感が苦痛にまで感じられる」ということでなければいけないだろう⁸⁾>と述べておられる (<>は引用文又は要約個所、以下同じ)。ここで次の sestet が前の quatrain の原因を述べているので、先にまで読んだ方が分かりやすい。

'Tis not through envy of thy happy lot,

But being too happy in thine happiness,—

That thou, light-winged Dryad of the trees,

In some melodious plot

Of beechen green, and shadows numberless,

Singest of summer in full-throated ease.

それはお前の幸せな運命を妬むからではなくて、
お前の幸せの内にあまりにも幸せを覚えすぎたから、—
というのは、お前は、軽い翼をつけた森の精であるが
緑のブナの木蔭も無数に織りなす
どこか調べも豊かな森で、
喉を一杯にふくらませて、夏を称えて歌っているから。

これを読んでしまうと最初の quatrain と次の sestet との間の気分が、次第に変わってきているので、内容的に原因と結果の働きをなしているのかどうか分らなくなる程である。最初は quatrain で言った気分はどんな理由で起きたものかと言おうとした。ところが Robin Mayhead⁹⁾ 氏も指摘しているように、鳥の幸せの中に幸せを覚えたからと言ったことによって、つまり happy や happiness という語を使ったことによって気分が変らざるを得なくなった。そして<4行連の麻酔のかかったような(眠気を催す)だるさの後で一種の新鮮な感覚、つまり“light-winged”「軽い翼の」と言ったことによって、生を取り戻したような感じを得る⁹⁾>と言っている。

言葉のはずみで、次々と連想を織り成していってしまうのだが、quatrain の narcotic drooping (麻酔のかかった眠気) は an excess of happiness¹⁰⁾ (幸福の極み) からきていると言ってもいい。緑のブナの森で快く歌っている森の精なる鳥の歌声を聴いていると、その幸せの内にすっかり幸せを覚えて、胸が痛くなる程になり、肉体は弛緩してまるで眠りに引き込まれるような麻痺を感じる。感覚という感覚は快感のあまり痛みを感じる程だ。身も心も毒人参や阿片剤を飲んだように一種のだるさをもたられ、まるで亡却の河に向って沈んでいったように引きずり込まれる気分であると。もう一度前に戻ってみると My heart aches, and a drowsy numbness pains / My sense, (私の胸は痛む。それに眠くなるような麻痺が / 私の感覚を痛める) は鳥の美しい声に聴きほれて、その美しい調べに快感を覚え快感が痛みに迄に感じられる程になり、眠くなるような麻痺が身体中に泌み渡り、感覚 (sense) が極度の緊張状態によって痛みを感じる程になった、と解し得よう。そこで<麻酔剤のメタファ>が利いてくるので、それが第2スタンザの酒にも響いていく。このスタンザの一行目については更に第六スタンザではっきりしよう。

この詩の言葉の連想として、メイヘッド氏は、<beechen green の green から新鮮さを覚えさせ、shadows numberless の shadows は陰うつな感じの言葉だが、蔭を投げることによって豊かな葉の茂りを思わせ、summer によって温暖な気候の中に、色彩と暖かさを思わせる。最後の ease は最初の物憂い、たゆたうような出だしを考えたら、待ちもうけていた帰決の言葉であ

る¹⁰⁾>と言っている。まさに出だしの物憂い、たゆたうような感じは、快感なんぞと言っている
られない苦痛にまで高められた気分であったが、次第に happy とか light とか melodious とか
green 等の言葉によって、沈んで行った気分が、引き上げられて羽ばたかせる程になってしまっ
た。言葉の持つイメージによって更にイメージを生んで Fancy を豊かにしている。
第2スタンザの quatrain は、何か胸にある痛みを癒したい切なる願いを酒に求めた叫びのよう
である。

II

O, for a draught of vintage! that hath been
Cool'd a long age in the deep-delved earth,
Tasting of Flora and the country green,
Dance, and Provençal song, and sunburnt mirth!

ああ、一杯の葡萄酒が欲しい！ これまでずっと
長い年月の間、地中深く掘られた酒倉の中で冷されたものを、
味わいは花の女神の味がし、緑の田園の味がする。
踊りや南仏^{プロヴァンス}の歌や陽に焼けを陽気な人々を彷彿とさせるもの。

言葉の上からは前スタンザの終りの full-throated の喉から、喉を潤おしたい気持や、忘却への
誘惑が葡萄酒への渴望を引き起したものであろう。極度の快感を痛みに迄覚えるキーツにとって
は、普通の者が快感を覚えたら、踊り出すか唄い出すか、笑い出すか、騒ぎ出すか何かであらう
が、Fancy が浮かんで出てしまった感である。忘却の酒を！ と思っている内に、前スタンザの
summer に引かれて冷やかな酒が、地下深い穴蔵で醸出された酒が欲しくなり、味は地中海的な
陽気なもので、この重々しい何かを吹き払ってくれるような、花や緑や踊りや唄や南仏の詩人や
歓楽を彷彿と味わせてくれる何か暖かくて陽気なもの、パッと浮き世のものを忘れさせるもの
(とまではここでは考えなかったが、後になってひっかかって出てくる) そんな酒が欲しいと願
う。次の sestet では、quatrain と couplet に分けられるが、vintage から引き起こすイメージ
群がふつふつとして沸き上がってくる。

O, for a beaker full of the warm South,
Full of the true, the blushful Hippocrene,
With beaded bubbles winking at the brim,
And purple-stained mouth;
That I might drink, and leave the world unseen,

And with thee fade away into the forest dim :

ああ 酒杯よ、暖かい南国で満ち満ちていて、
 真実本当うの、真赤な色を染めた詩的^{ヒボク}靈感^{クリエニ}の泉の水で一杯になり、
 縁では珠のような泡がふつふつとまばたきするように沸き、
 深紅に染まった注ぎ口をしている。
 その一杯を飲みほして、人に見られず（またこの世を見ないで）¹¹⁾ 離れたい。
 お前と一緒に小暗い森の中に消えてしまいたい。

酒杯に注がれた真赤な葡萄酒がふつふつと小さな泡を明滅させている。詩的靈感が沸き起ってくる酒、既に色よく染めて赤くなっている詩神の泉である酒、注ぎ口はまるで美女を思わせるように真赤に染まっている。winking at the brim を<美女の艶なるまばたき>と見、purple-stained mouth を<葡萄酒に濡れて唇の朱を一層つややかに見せている美女の口¹²⁾>と見ると一層あざやかになまめかしく覚えてきて、酒徒ならずとも「ああ一杯の酒よ」と叫びたくなる。「その一杯を飲みほして、人に見られず、そしてこの世を見ずに離れたい、」という the world unseen の内に自ずと現実の世界を思い出したくない気持が隠されていて、秘かに幸せな鳥と共に小暗い森に消え去りたいと願う。メイヘッド氏は<酒を求めるのは忘却 (oblivion) への欲求だ¹³⁾>と言っている。阿片を飲み、酒を飲むことによって、秘めている苦悩を忘れるような、朦朧とした小暗い世界に入って行って、幸せな鳥と一緒に居れたなら、この世の悲惨を見ずにすむであろう。そう思って、fade away に引かれて、飛び立って消え入ろうとした時に、飛び立つ足元の悲惨な現実を想起してしまったのである。酒によって忘れ去ろうとした何かあるものを、酒を飲む前に想起してしまったのが第3スタンザである。

III

Fade far away, dissolve, and quite forget

What thou among the leaves hast never known,

The weariness, the fever, and the fret

Here, where men sit and hear each other groan ;

Where palsy shakes a few, sad, last gray hairs,

Where youth grows pale, and spectre-thin, and dies ;

Where but to think is to be full of sorrow

And leaden-eyed despairs,

Where Beauty cannot keep her lustrous eyes,

Or new Love pine at them beyond to-morrow

はるか彼方に薄れて行って、融けて すっかり忘れ去ってしまいたい。

葉蔭の中のお前には、決して分らないことどもを。

倦怠，熱病，焦燥は

この世の中にあり，そこでは人々がお互いの呻き声を坐って聞いている。

中風病みの老人は，哀れにも最後の白髪を震わせている。

若者は色青ざめて，亡霊みたいにやせ細って 死んでいく。

物を思うこととは悲しみと，

鈍った鉛色のような目をした絶望に満ちることに他ならない。

美人は輝く眸をいつまでも保つことはできないし，

今生れたばかりの愛でも明日以降もそんな眸に焦がれることはない。

ここでは、人生の赤裸々な姿を何か悲哀を籠めてじっと凝視しているような気がする。最初の二行は忘却を求めて鳥と共に森に消え入りたいと願っている。しかしここで始めて忘れ去りたい理由が浮び上って目の前に提示されてくる。ここでは7つ程の現実の姿，それぞれの言葉に連想を走らせるニュアンスを持っている。The weariness (倦怠)，the fever (熱病) (He had a fever late, and in the fit (*The Eve of St. Agnes*, 12,2), With anguish moist and fever dew; (*La Belle Dame Sans Merci*, 3,2) の用法から熱，熱病と解釈)，the fret (焦燥) は，ワーズワースの *Tintern Abbey*, 52 “the fretful stir/Unprofitable and the fever of the world” とカシェークスピアの *Macbeth* III. ii, 23: “After life’s fitful fever he sleeps well¹⁴⁾.” を想い起こさせる。それはどんなものであれ，苦悩に満ちた叫び声を挙げている世界だ。また老人と若者とが対になっていて，老人は中風病みで身を震わしている (palsy shakes a few, sad, last gray hairs, の単音節の epithet (形容語句) は弔鐘 (knell) を思わせる ((Lamborn)¹⁵⁾ のを見れば人生の悲哀を覚え，若者は結核で病んで死んでゆく，と聞けば，それが弟の Tom Keats が肺結核で約半年前の1818年の12月1日，19歳で死んでいる¹⁶⁾ のを暗示していると言われれば，更に憐憫の情を覚える。物を想うことは悲しみと鈍色の絶望に満ちることなのか，“*Ode on Melancholy*” の中の言葉と同じように，「美は滅びさらねばならぬ」 (Beauty that must die:) のか，「喜びは唇にいつでも手を当てて別れを告げている」 (And Joy, whose hand is ever at his lips/Bidding adieu…) ¹⁷⁾ のか，悲哀と薄命と，悲しみと絶望と，儂なさと無情とが混頓としているのがこの人生だ。そんな人生から，もう一度鳥の所へ飛んでゆこう，と決意するのが第4スタンザである。

IV

Away! away! for I will fly to thee,

Not charioted by Bacchus and his pards,

But on the viewless wings of Poesy,

Though the dull brain perplexes and retards ;

去れよ 去れ！ 私はお前の所へ飛んでゆくから、
酒神と豹の車に乗らず、
詩想の目に見えない翼に乗って
鈍い頭は戸惑いのろのろとしか進まないが。

Away! はこの場合 *ambiguity* な言葉で (1) ((酒よ)) 去れ¹⁸⁾と(2) ((自分が)) 去ろう¹⁹⁾ という意味が解されている。(1)では *for* が次にくるので、前に言ったことに対する証拠または説明を追加する²⁰⁾意味で、酒の力でなく、詩想の翼に乗ってお前の所へ飛んでいくから、もう酒は要らない、「あっちへ行け、去れよ、去れ」と言って酒への想いを振り払うのと、(2)では第2スタンザの *Fade far away* (遠くへ消え去る) の余韻を受けて *fade* を落とし、更には次の *fly* と結びついて *fly away* (飛び去ろう) と積極的な意味を持たし「去ろう」と解する場合とがある。前の人生の悲惨な実状を思い出してしまった今、何となく振り払う気持になって、もういいもういい、そんな考えはあっちへ行け。そんな所から去らせてくれ、ああ早く去ろう、去ろう。もう酒の力によって陶酔するのではない、酒はもういい もういい。詩の見えない翼に乗って陶酔への世界、お前の所へ行くから、消え去りたい。さあ、お前は鳥と共に森へ「去れよ 去れ！」というような意が汲み取れる。

4行目の *the dull brain perplexes and retards* は身に沁みて覚える言葉だが、語感からも困乱戸惑いして、のろのろと遅れる感じが出ている²¹⁾。

Already with thee! tender is the night,

And haply the Queen-Moon is on her throne,

Cluster'd around by all her starry Fays ;

But here is no light,

Save what from heaven is with the breezes blown

Through verdurous glooms and winding mossy ways.

もうお前と一緒にだ！ 夜は何と優しいことなのか
恐らく月の女王は玉座に登り
全ての星の妖精に群がり囲まれていることだろう。
でもここには 光はない。
緑の暗闇と曲りくねった苔道を通して
そよ風が吹くと共に天から洩れてくる光の他は。

前の *quatrain* との間から急にファンシーの世界に入るには心の準備ができていなく *chariot* や *wings* にすばやく乗って来たようだ。しかし *already* によって、もうよし 今はできた、という準備と決意がこの一語によってもたらされ、前行ののろのろした思考の歩みから、[*ç:lrédi*] の

もつ長母音の間延びからその間の思考の準備ができ、鳥（の声）に溶け入ったことが感じられ、次の *tender is the night* が身に沁みじみとして感じられるようになる。地上の喧噪から離れ、心を柔らかくしてくれるもの、キーツにとって *soft* なもの *sweet* なもの、*easeful* なものがどんなに心をなぐさめてくれる (*tender* な) ものであったことであろう。全てを静めて、目に見えぬ夜の世界が優しく取りまいて、それに浸り切ることが、無上の喜びとなっている。精神的な優しさと肉感的に包まれている優しさとが、この *tender is the night* に感じられる。木の間から微風にそよいで洩れてくる光によって、月が上って、星もあたりにまたたいているのだろう、と地上にいて推察する。ここではファンシーが動いていないのは指摘の通りである²²⁾。葉蔭ではちらちらと光はもれているが、「しかし、ここには光はない」と強く言いきっている。*gloom* とか次に出てくるように、*I cannot see*（目には見えない）とか *Darkling*（暗闇で）で、この場所は真暗なのである。その暗さが、次の馥郁たる芳香を際立たせている前提になっている。

V

I cannot see what flowers are at my feet,
 Nor what soft incense hangs upon the boughs,
 But, in embalmed darkness, guess each sweet
 Wherewith the seasonable month endows
 The grass, the thicket, and the fruit-tree wild ;
 White hawthorn, and the pastoral eglantine ;
 Fast fading violets cover'd up in leaves ;
 And mid-May's eldest child,
 The coming musk-rose, full of dewy wine,
 The murmurous haunt of flies on summer eves.

私の足元にどんな花々があるのか見えないが、
 またどんなほのかな柔らかい香りが枝々に懸っているのか分らないが、
 しかし、芳香に満ちた闇の中で、それぞれの甘い香りを当ててみよう。
 ちょうど季節もふさわしい五月が、
 草や、繁みや、野生の果樹に与える香りでもって。
 白い花のサンザシ、牧歌で謡われる野イバラ。
 草葉にすっかり覆われてしまって、早速に色褪せているスマイレ。
 そして五月の中旬では一番の姉さんである
 ちょうど今咲き出す麝香バラ、露のような酒（蜜）を一杯貯めている、
 そこには今この夏の夕べにブンブンと羽虫が飛び交い群れている。

闇の為に見分けることができないが、香りでもってどんな花々が咲いているか当ててみよう、

と香りを胸一杯に吸ってむせているような感じのする節である。草花の名前が次々に探り出されて、そこから漂う香りを嗅ぎこむような感じで、それぞれの形容詞と花の名前とが相俟って、イメージを豊かに彩ってくれる。一つ一つのものを見極めていくから（‘poesy’がないというけれど²³⁾）、それこそ Imagination の働きによって香りが馥郁と漂い、花の色がイメージに浮んでくるのではないだろうか。更には第9・10行では「露のような酒」からネクターのような甘い蜜の溢れを感じさせ、そこに群り集まる虫の羽音を聞くような感じを得させるのであって、まさに ‘poesy’ が豊かにあふれて出ている。第6スタンザへの導きが、闇の中で聴いた *murmurous* な響きによって、聴覚へ転移していったものか、むせ返るような甘さに酔いしれたが為に、いまにも *swoon to death*（気が遠くなって死ぬ）の思いを感じた為か、である。しかしそれは次に浮かぶことであって、ここでは全然死のことを考えていないのであって、ふっ切れていていいのである。ここでは真剣に花の匂を嗅げばいい²⁴⁾。

VI

Darkling I listen ; and, for many a time

I have been half in love with easeful Death,

Call'd him soft names in many a mused rhyme,

To take into the air my quiet breath ;

暗い中にて私は耳を澄ませてじっと聴き入る。そして何度も何度も

私は安らかな死を半ば恋してきた

多くの瞑想の詩の中でお前をやさしい名前と呼んできた

どうか私のこの静かな息を大気中に引きとってくれと。

暗い中でじっと聴き入っている時、死のことを何故思い起こしたのであろうか。その契機は耳を澄ますことによって、鳥の甘美な歌声があまりにも *ecstasy* なものと覚えたからであろう。次の *sestet* と絡ってくる。

Now more than ever seems it rich to die,

To cease upon the midnight with no pain,

While thou art pouring forth thy soul abroad

In such an ecstasy !

Still wouldst thou sing, and I have ears in vain—

To thy high requiem become a sod.

今死ぬことがいつにもまして豊かに思える時はない。

この真夜中に苦痛もなしに絶えること、

そんなにも恍惚となって

お前が魂を注ぎ出している間に！

いつまでもいつまでもお前は歌い続けるだろう。そして私は聴こうとしても無駄である。

お前の高い（尊い）鎮魂のミサ曲には一塊の芝生の土になっているのでもう聴けない。

ここにして最高の歓喜，恍惚に包まれている。鳥が恍惚となって全霊を注いで歌っているのを聴いて，swoon to death²⁵⁾（失神して死んでしまう）を覚えないではいられない状態になっているのである。前節の花の香りにもまして，聴覚が更に研ぎ澄まされることによって，鳥の歓喜と一致したため，死んでもいい，今死ぬことが“rich”（=blessed²⁶⁾）「至福」に思われるのである（他にも“Ah, if to thee/It feels Elysian, how rich to me”（あなたにとって理想郷と思えるなら，私にも何と至福なことなのだろう）（*Endymion* II. 315)）。冒頭の My heart aches, and drowsy numbness pains/My sense,（胸が痛む，眠るような麻痺が感覚を痛める）と言わせたのも，今では胸の痛みを忘れる程になっているのではないかと思われる程である。阿片を飲んでうっとりとするような痛みを覚える程とは矛盾する言葉であるが，ecstasy の状態が見分けのつかなくなる程，感覚の麻痺を起こしているからである。easeful Death（安らかな死）も soft names（やさしい名前）も quiet（静か）に死ぬことも，ecstasy の内にあれば，そのように覚えるのを口にしたくなかったものではないだろうか。「多くの瞑想の詩」の中で謡ってきたのも，快感が極度に達した状態が安らかな死をもたらせるものと思えたからである。しかし，魂を注ぎ出して鳴き続けている鳥が，いつまでも歌い続けるように思えて，最後の2行になって，自らのことを思うようになる。「一塊の土くれ」になってしまう現実を意識させる行だが，いつまでも歌い続ける鳥の永遠不滅性を世代が変わろうと，同じ歌声を聴かせることには変りないと言って次のスタンザから始るのであって，想像力は絶えず働いている。To take into the air my quiet breath <息を吐き出して，つまり歌をうたいながら死ぬこと>²⁷⁾ととると，更にキーツの血を吐いてでも謡い続けた状況が，まるでナイチンゲールと同じ歌声となって響いてきて，まさに pouring thy soul「魂を注ぎ出して」歌う精霊となっている。Shelley の “To a Skylark” の “Pourest thy full heart/In profuse strains of unpremeditated art”.(ll. 4-5) や “And singing still dost soar, and soaring ever singest”. (l. 10) の一句とキーツの “Still wouldst thou sing” とは似た言葉となっている (blithe Spirit と immortal Bird とはまた微妙な味を持っているが)。

次の第7スタンザは，最初の1行の前提と次の1行と1つの couplet と，2つの tercet が説明するものとして読んでいって見ると，

VII

Thou wast not born for death, immortal Bird!

No hungry generations tread thee down ;
 The voice I hear this passing night was heard
 In ancient days by emperor and clown :
 Perhaps the self-same song that found a path
 Through the sad heart of Ruth, when, sick for home,
 She stood in tears amid the alien corn ;
 The same that oft-times hath
 Charm'd magic casements, opening on the foam
 Of perilous seas, in faery lands forlorn.

死ぬ為にお前は生れはしなかった 不滅の鳥よ！
 いかにかつた世代でも お前を決して踏みしだかない。
 過ぎゆく夜に聴く声は
 昔の日々に帝王や野人によって聴かれたものである。
 恐らく同じ歌声は望郷の念にかられているルツの悲しい心の内に深く入っていった、
 異国の麦畑に立って涙に濡れている時に。
 同じ歌声がしばしば危険な海の
 白く泡立つ波に開いた、魔法をかけられた窓を
 魅惑させてきた 遠いはるかな寂しい仙境の。

前スタンザの「私は死んでもお前は歌い続けるだろう」という意味が進んで「死ぬことはない、不滅なんだ」という確信に至って、「不滅の鳥よ！」と言って呼びかけている。観念的には疑問が生じる。「お前は死なない」なんてことがあるだろうか。それを解消する為にく如何なる世代もお前を無視はしなかった>と云って、不滅の鳥の歌声を過去の世界に導いて、“Poesy”の世界に入っていく。“hungry generations”の hungry の意味が2つに採られている。(1)「飢えた世代の人々」ということで、飢えに苦しむひもじい人間 或いは時代²⁸⁾、と(2) Wordsworth の *Excursion* (iv 760-2) を挙げて M. Allott 氏の注²⁹⁾を見てその中の countless generations of mankind とか、devouring Time³⁰⁾とすると、「全てを食いつくしていく時間の流れ」、「新しい世代の者が古い世代のものを食い尽していく」との2つが考えられる)。ここではルツの譬えが次に出てくるが、アロット氏はここではルツは飢饉の為に古里を追われて親戚の Boaz の畑で働かねばならなかった³¹⁾ (Ruth ii, 3) の引用している。それからすると、飢饉の時代のことも想い浮べてることもできるし、また「飢えて絶えず新しい世代を欲している時の流れ」として見ると次の文章の流れについていける気もする。今聴いている声は、昔の帝王や clown やルツや恐らく魔法にかけられて開かぬ城の窓の中の姫が、聴いたことだろうと想像を馳せる。“emperor and clown”の clown は、countryman, peasant³²⁾、や farmer³³⁾ の「農夫」に解している。(アロット氏の注では Shirley の *Ajax and Ulysses* (1659) 5-8 の一節 “Septre and Crown/Must tumble down/And in the dust be equal

made/with the poor crooked scythe and spade...³⁴⁾”を引いている。王冠も笏も鎌やすきと一緒に土の中に埋められる、意から、身分の高い帝王も低い農夫も一諸になることと解する)。なお “fool” (道化) court-jesters³⁵⁾の意味もとれる語であるので、ambiguous な意味で、身分の高い華やかな者も低い貧しい者の野人も歌声を聴いた、という意であろうし、「道化」ととると王の側にいつもついて気嫌をとっていることから哀れと華やかさの中の寂しさが漂う感じがする。古郷を恋して麦畑に泣き濡れて立つルツの話は (“Ruth, a Moabitess, accompanied her mother-in-law, Naomi, to Bethlehem. There, in an alien country, she became a gleaner in the fields of Boaz ((Ruth. ii-3))³⁶⁾<落穂拾いをして姑を養ったということで「故郷を恋しがった、云々」は Keats の想像³⁷⁾>であるようだ。これはあくまでもキーツのファンシーで、遠い聖書の時代を想い描くことによって、絵画の世界に迄高めており³⁸⁾、ルツの悲しい心に共鳴するナイチンゲールの声が悲しみの叫びとなって響いているのである。ここで魅惑する鳥の声が哀しみを帯びていることは、今迄のニュアンスとは違ってきている。歓喜の内に鳴く鳥の音が、自らが sod (芝士) になる時、既にその哀愁が忍び入ったようである。最後の tercet でもお伽の国という、幼い頃の郷愁が残っていて、はるかな中世の物語を夢の世界にまで高めているのである。ファンシーは更に、Charm'd magic casements 「魔法にかけられた窓を魅了した」と言ったことによって、物の見ごとに花開き、faery land (妖精の国, 仙境, お伽の国) に導いてくれたのである。(キーツは最初と中間の版では “fairy” と書いたが、それはシェークスピアの fairies とは違った妖精を暗示していた。2回目には “faery” と直して中世的なロマンスを呼び起こすようになった³⁹⁾。ただし Allott の編では “fairy” となっている⁴⁰⁾。) 「不滅の鳥」と言ったのは正にこれと同じではないかと言っている。美しい音色は帝王や野人やルツや姫を魅惑したが、それほどの人の心にも昔ばなしを思い起こすと同じものなのだ。そこには郷愁と魅惑がある。遠い離れたお伽噺の世界のように永遠に人々の心に生き残っている。お前もそのように永遠なんだと、第一行目に言った観念的な言葉のずれを納得させている。しかし懐かしい郷愁の地 faery land (お伽の国) を forlorn (はるか離れた遠い寂しいところ) と言った時、forlorn のもつ ambiguity のもう一つの意味が強烈に長い響きをもって痛切な叫びとなって出てくる。

VIII

Forlorn! the very word is like a bell

To toll me back from thee to my sole self!

Adieu! the fancy cannot cheat so well

As she is fam'd to do, deceiving elf.

はるか寂しい! 正にその語は弔鐘のように

鳴り響いて、お前の元から一個の自分に引き戻す!

去らばよ！ 空想は評判ほどに
 それ程うまく欺してはくれない 欺きの精よ。

もう一つの意味と響きに気がついて愕然としてファンシーが覚めてしまう。この哀調の帯びた語は先にははるか遠い夢の世界の「寂しいところ」を懐かしい哀惜を帯びた気持で使ったのが、ファンシーのなせる業であった。しかしもう一つの語感が浮んで、一瞬はっとするような、気持にとらわれ、つついつつられて言ってしまった気持を、思い切ってもう一つの意味に飛び込もうとして、言葉を十分噛み締めることになっている。“forlorn”（因みに辞書を括ってみると OED. には 1. Lost, not to be found. *Obs.*; 2. Morally lost; abandoned, depraved. *Obs.* 3. “Lost”, ruined, doomed to destruction. *Obs.* 4. Of person or places: Abandoned, forsaken, deserted: left alone, desolate. 5. In pitiful condition, retched. 等々) の二義性のもう一つは「見捨てられた、見放された」から「寂しい、孤独な」という絶望的な孤独な気持に移っていく心理的過程が伺える。つまり同じ *deserted* (人気のない、さびれた、見捨てられた) のような意が「寂しいところ」から、一転直下「見捨てられた」気持ちを味い、寂しいみじめな気持になり、孤独な一個の自分に気がつくのである。「空想は評判程に人をうまく欺し得ず」はこのことを言っているのであって、微妙な言葉のニュアンスが空想をはばたかせるか、地に迫り落すか、その思考の動き、*Imagination* が働いているのである。イマジネーションは《物を見透す力》、*Vision* (物を見る力) ととるならば、“fancy” はまだまだ人を欺しやすいもので、空想に浮かれ飛び回ることもできるのである。“deceiving elf” 「欺きの精」と呼びかけるのも、空想が途切れしてしまって、もう続かないではないか、なんとした言葉を出してくれたのか、となじる気持が籠められている。当てにするといつも裏切る者よ、当てにならないが頼ってしまうまやかし者よ、よくは欺さないが欺すものよ、と妖精のような可愛いらしいものとして“elf” がでてきたものと思う。アロット氏が指す *Endynion* ii の個所 (ll. 274~280 迄を挙げる) はこの間の事情をよく示しているのを見てみると、

There, When new wonders ceas'd to float before,
 And thoughts of self came on, how crude and sore
 The journey homeward to habitual self!
 A mad-pursuing of the fog-born elf,
 Whose fitting lantern, through rude nettle-briar,
 Cheats us into a swamp, into a fire,
 Into the bosom of a hated thing.

そこでは、新しい驚きが目の前に漂うことを止め、
 自己の思いが浮かび上ってきた時、どんなに残酷で痛いものか

いつもの自己へ家路を辿る旅が！
 狂ったように追いまつわる霧から生れた妖精（＝狐火）が
 ちらちら輝くちょうちんで、荒れたイラクサのイバラの中を通り過ぎ、
 欺して我らを導くは、沼地の中や火の中や、
 嫌な事柄一杯の胸の中、

＜靈感を受けて我を忘れることは瞬間に過ぎない。そして靈感から一転して平凡ないつもの我に帰ることは、傷ましくもあり残酷でもある⁴²⁾。＞と斎藤 勇先生は述べておられる。今や自己に目覚めてしまっは鳥の声も遠のいていくしかない。

Adieu! adieu! thy plaintive anthem fades
 Past the near meadows, over the still stream,
 Up the hill-side; and now 'tis buried deep
 In the next valley-glades:

Was it a vision, or a waking dream?

Fled is that music:—Do I wake or sleep?

さらば さらばよ！（哀調を帯びた）歎きの賛歌は
 近くのまき場を通り過ぎ、静かな流れを越えていき、
 丘の中腹をのぼって行って、そして今は
 向うの谷間の空地に深く深く埋れてしまった。

幻影だったか、目覚めた夢か。

調べは去った。目覚めているのか、眠っているのか。

遠のいていく鳥の声を追って、一緒に想像力もついて行く。野や川や丘を越えて谷間の奥に想像を馳せて一緒に埋もれてしまう。既に想像力が働かなくなった今、完全に鳥の鳴き声が聴こえなくなった今、先程迄の美に陶醉して想像力の世界に浸っていた時が失われた今は、それが本当うにあったことかどうか忘然自失の思いで分らなくなっている。Was it a vision, or waking dream? と自問する時、それが本当うにあって見たことだったのか、単なる起きている時の夢想だったのか、と。美が常住不断でないことを知っていて「美は永遠の喜びである」と言ったのも、美を掴もうと想像力を傾注して研ぎい出す時、現在の時間の中から空間の世界の中に身を置くことになる。川の流に目をやってじっと瞑想に更っている時、川の流を追ってはいない (to let fair things/Pass by unheeded as a threshold brook. ((*Four Season* II. ll. 11-12))). その想像力の世界にある時、見る者に受け入れる心がある時は (In that which becks/Our ready minds to fellowship divine./A fellowship with essence; ((*Endymion* I. ll, 77-79))) 喜びを与えてくれ、美が存在する。美と見る者の間に交感 fellowship がなければ、美は存在しない。

ものを観る力、ここでは聴く力をもって想像力が鋭敏に働かなければ、既に歌声は聴こえないのと同じである。一瞬時の美との交感があつたなら、そこにはやはり美との合体、存在があつたので、幻影だったかとか白昼夢だったとか今更言うこともなかつた。ただあまりにも惜しむ気持ちがいつまでも残っていて、一瞬疑うことによって、また思い起こす切っ掛けを与えてくれる。しかし鳥の歌声が去った今、それがどうなんであろうか、果してその力はあるのか、「起きているのか眠っているのか」と自問せざるを得ないのである。想像力を失った今、眠ったものと同じではないか、とつと椅子から立ち上ってプラムの木の下をはなれ、原稿を友人のいる前でそっと本の上に差し挟んだのである。

註

- 1) Robert Gittings: *John Keats* (Penguin Books, 1979), p. 462.
- 2) Miriam Allott ed.: *Keats, The Complete Poems* (Longman, 1977), p. 524.
- 3) *Ibid.*, p. 523.
- 4) Robert Gittings: op., Cit. p. 463.
- 5) 訳詩にあたり、小川和夫先生の『キーツのオード』(大修館書店、1980)の「Ode to a Nightingale」を中心に訳を参照させて頂きました。他に、出口保夫『キーツ全詩集』2(白風社、1974)の「小夜啼鳥に寄せるうた」p. p. 133~9., 松浦暢『キーツ—その夢と現実—』(吾妻書房, S. 54)の第七章ナイティンゲール—自我脱却の悲劇—, 斎藤勇『キーツ詩選』(研究社小英文叢書, 1980), 岡地嶺『キーツ詩集』(泰文堂, S. 54)等を参照し、適訳語を使用させて頂きました。
- 6) 斎藤勇, *Keat Poems*, (研究社英文学叢書, 1980) p. 115.
- 7) 小川和夫『キーツのオード, 鑑賞と分析』(大修館書店, 1980)の中の「Ode to a Nightingale」.
- 8) *Ibid.* pp. 128-130.
- 9) Robin Mayhead: *John Keats* (Cambridge, 1967) p. 70.
- 10) *Ibid.* p. 70.
- 11) John Barnard, ed. *John Keats, The Complete Poems* (Penguin Books, 1976 p. 655 の訳注より), また小川和夫: op., cit. p. 150 にも述べられている。
- 12) *Ibid.* p. 149 でみごとにイメージを浮び上らせている。
- 13) Mayhead: op., cit. p. 72.
- 14) 斎藤 勇, *Keats Poems* (研究社英文学叢書, 1980) p. 116. の訳注より, 或いは Miriam Allott ed. op., cit. p. 526.
- 15) 斎藤 勇, op., cit. p. 526 訳注より。
- 16) Miriam Allott ed. op. cit. p. 526.
- 17) *Ibid.* p. 527.
- 18) 斎藤 勇, op., cit. p. 116.
- 19) 小川和夫, op., cit. p. 154, 上島建吉, *English Romantic Poetry—An Anthology—* (研究社小英文叢書, S. 42), p. 117 では Let me fade away !.
- 20) 小稲義男, ed. 「新英和大辞典」(研究社, 1980) for の項 ex. I say no more, for I detest explanations. (もう何も言わない, 私は弁明は大きらいだから)。
- 21) Mayhead: op. cit., p. 72.
- 22) 小川和夫, op., cit. p. 154.
- 23) Mayhead: op., cit. p. 74.<どんな花から匂が漂ってくるか推量できるが, 前に言った poetic “fancy”

とは同じではない。想像力の働きは、ここではしっかりとした観念 (a solid notion) のもとに根づいて目に見えない花々がどんなものであるかしっかり認識しているからだ。言葉には特色があるが、“Poesy” の作用を少しも持っていない。>と言っている。

- 24) 小川和夫, op., cit. p. p. 161-3, ベテットの推察を出されて、みごとにその余計な観念を排除されている。
- 25) “Bright Star” の l. 14. 小川 和夫, op., cit. p. 168, 他に swoon について例を示して詳しく述べられている。
- 26) 斎藤 勇, op., cit. p. 118 の注。
- 27) 上島建吉, op., cit. p. 117.
- 28) *Ibid.* p. 118 やその他の訳に。
- 29) Miriam Allott. op., cit. p. 530.
- 30) 佐藤 清: 『キーツ詩選』(南雲堂, 1981), p. 98 の注。
- 31) M. Allott, op., cit. p. 530. “Ruth was driven by famine from her native land and had to work in the fields of her Kinsman Boaz (Ruth ii, 3)” p. 530.
- 32) John Barnard ed.: op., cit. p. 658.
- 33) 上島建吉, op., p. 118, その他。
- 34) M. Allott op., cit. p. 530.
- 35) 斎藤 勇 op., cit. p. 118, Robin Mayhead. op., cit. p. 75. “cout-jesters”.
- 36) John Barnard ed: op., cit. p. 657.
- 37) 斎藤 勇, op., bit. p. 118.
- 38) Ian Jack: *KEATS and the Mirror of Art.* (Oxford, 1967) p. 237. ここでは Poussin の *Summer, or Ruth and Borz* の絵を挙げている。
- 39) Claude Lee Finney: *The Evolution of Keat's Poetry* (Russel & Russel. 1963.) p. 631.
- 40) Allott. op., cit. p. 530.
- 41) *Ibid.* p. 531., 小川和夫, op., cit. p.p. 123-4 でも引用されている。
- 42) 斎藤 勇 *Endimion* (研究社 S. 39) p. 175.